

和合僧を受け持つて捨つること莫れ。汝當に僧と和合して闇語すべからず。歎喜して誇わざれば同一水乳なり。仏法の中に於て安樂に住すべし。是の故に提婆達多、和合僧を破するは甚だ惡罪艱難にして大重罪を得。和合僧を破すれば、泥犁の中に在ること一劫するも、受罪は救うべからず。」文

日本山の中にたとい持戒の者あつて、僧中の是戒・非戒を分別し、自ら勝想を生じ、他に劣想を生じ、他の過を同求し、その短を説く者は正に提婆達多の余類である。何の所得も無くして、山中に破和合僧が行わるるのみである。

日本山の教団は僧尼の破戒・無戒の科に由つて破壊することは無い。天魔外道の怨敵に由つて破壊することも無い。もしこれを破壊する者がありとすれば、空閑に住して経を読み、禁戒を持って自ら勝想の中に止住すること能わざる者の出現することである。

かくて桶の尾の明慧上人、不善の僧を門下にとどめられ、僧の不善を語りし清淨の僧を五逆罪の人とかくして門下を擯出せられた。不善の僧をさえ擯出せざるに、清淨の僧を擯出せし明慧の涙は絶するに余りある。明慧の規矩は如来の制戒には違つかもしれないけれども、令法久住・和合僧海の為にせし深き慮りである。我もまた明慧に随わん。

(僧伽の社会生活 五六頁)

- 4 -

- 5 -

## 日師法語

### 日本之佛法

(ペリ道場開堂供養法語)

昭和五十年 五月八日 日達

南無妙法蓮華經

人間は現在地上に三十億万人が生存して居ると推定されます。此三十億万人は如何なる目的を持ち、如何なる仕事を営んで居るでしょうか。世界の現状を見渡せば、意識すると意識せざるとに係らず、人と人が殺し合い、結局人間と云う種族を絶滅せしめるが為に殺人戦争を行い、戦争に優勝せんが為に軍備を増強し、それを目的として日夜研究し訓練して居るようあります。

三十億万人の人間が、大小種々の国家を構成して居ります。大小何れの国家も皆悉く軍備を持って居ります。軍備を持たざる国家は有りませぬ。軍備とは人間が人間を殺す組織・集団・機械であります。凡て近代国家と称するものは何れも皆殺人戦争の大集団に外ならざるものであります。

抑も人間は何故に殺人・戦争を為さねばならないでしょうか。

總て地に生存する者には、「適者生存」と云う自然の法則が有るという。其の適者として生存せんが為に「生存競争」に勝利を得なければなりません。生存競争の結果から「優勝劣敗」と云う現象が現われます。優勝劣敗には「弱肉強食」と云う悲劇が演ぜられます。

蛇が蛙を呑む。蛙は鳴き乍ら遂に呑み込まれてしまいます。虎が鹿を食い、猫が鼠を捕り、鯨が鰐を呑みます。何れも悲惨なる事ではありますけれども、どうにも弱肉強食の法則を逃るる途は有りませぬ。人間は、弱肉強食の最優勝者として、鶏も食い、豚も食い、山羊も食い、牛も食い、魚も食い、虫も食います。人間程、何でも彼でも食う者は外には有りませぬ。それは生存競争場裡の勝利者として、人間に許されたる特權の如く自ら考へております。人間が或は牛を食い、或は鯨を食う事は無慈悲なようでもあり、悪い事ではありますけれども、然しまだ其為に軍備などは必要としませぬ。それ丈罪が軽いわけあります。人間が軍備を持つ所以（ゆえん）は、人が人を殺す戦争行為の為のみ必要であります。弱肉強食の悲劇が人間の社会生活に持込まれたるもの、それが則わち戦争であります。

人類は古来、何れの時代も、何れの民族も、何れの国家も、数々戦争を行つた事は歴史上疑いも有りませぬ。何れの戦争も一概に強い者が弱い者を殺害し支配したと云う、残酷行為であります。弱い者、小さい者が、強い者、大きい者に対して戦争を起した事は有りませぬ。戦争とは全て、侵略戦争で有ります。

ます。戦争は全て重大犯罪で有ります。

三十億万人の人類は否応無しに西洋文明の中に生活して居ります。西洋文明は科学文明であります。機械文明であります。殺人文明であります。戦争文明であります。

科学文明を開発した欧羅巴人（ヨーロッパ人）の行く所は、必ず侵略が行され、必ず戦争が行され、必ず征服が行され、必ず支配が行われます。現在世界一百有余の大小の諸国家の中、曾て欧羅巴人の、侵略支配を受けなかつた国家が何ヶ国有るでしょうか。

科学文明は欧羅巴人を驅り立て、侵略征服に狂奔せしめたるのみならず、経済発展至上主義を信じて、自然環境に対しても取返しのつかない破壊工作を行いました。空気も、水も、皆汚染して、生物の生存に有害不適当ならしめ、地下の自然资源も採掘し尽して、枯渴せしめました。科学文明は所謂暴力文明にして、科学が如何に進歩しても、人類の道德・宗教等の精神生活面には一步の前進だにも寄与する事無く、却つて精神生活を濁乱せしめました。科学文明は呪はるる可き文明であります。

弱肉強食の外に、「種族保存」の法則が有ると云われます。虎も、獅子も、狼も、親は強大であり、子は弱小であります。併ら親は其子を食ひませぬ。反対に我子に乳を与へ、餌を与えて育てます。此現象は、猛獸にも、暴力の外に、精神的な愛情・慈悲の心の活動が行われて居ることを証明します。是れ則わち宗教・道徳の基礎を為すものであります。之を非暴力と呼びます。

弱小の者に乳を与へ、餌を与うる心を推し拡げて隣りの者に及ぼし、又その隣りの者に及ぼし、かくの如く展転して、その心を拡張すればする程に、我子が生長する如くその種族も又繁栄します。暴力一偏に依存する強食種族は自然に滅亡します。虎や狼は地上に其数を減少しつつあります。これに反して、何らの暴力も武器も持たざる弱肉種族は山羊も鶴も、雀も鳥も、世界到る所に人間と共に繁栄して居ります。

宗教は人類の発生と同時に現われました。是を神話時代とも云い、神代史とも云います。宗教は凡そ人間の権威する所には何所にも弘まつております。山間には山の神、海洋には海の神が祀られてあります。宗教は人間が他の一切の動物から区別さるる唯一の特徴であります。他のいかなる動物も宗教を持つておる者はありませぬ。

— 8 —

宗教は人間に何を教うるのでしょうか。宗教は人間に礼拝を教えます。礼拝とは相手に尊敬を捧ぐる我身の儀式・作法であります。礼拝は機械的な動作に非して、相手に尊敬を捧ぐるに値する尊重なるものを見出さねばなりません。宗教は先づ最初に、一般人間に共通して礼拝すべき相手、尊重なる対境を与えます。仏教では、諸仏・菩薩であり、耶蘇教では、神の如きものであります。やがて之を社会に生活に応用して、他人を礼拝致します。先づ父毎を礼拝し、師長を礼拝し、指導者を礼拝します。次には值う人毎に礼拝します。遠方の人をも禮拝します。後には<sup>だま</sup>仮便いかなる悪人でも、又如何なる劣等人

でも礼拝します。

家庭の和合も夫婦互に尊重して礼拝し、国家の安全も上下互に尊重して礼拝し、社会の平和も老若互に信頼して礼拝します。總て平和と幸福とは相互の礼拝から始まります。人間種族の生存繁栄もお互に礼拝を行うより外に之に優る如何なる手段方法も有りませぬ。是を但行礼拝と申します。宗教とは云つても、他人を礼拝する事を教へざる宗教は現代を救う宗教ではありません。

— 9 —

身に礼拝を行うと同時に、口には礼拝する理由を申べて讚歎します。身の礼拝は何所でも何時迄も、続けて行うことは出来ませぬが、口業の讚歎は、寝ても起きても、歩行でも坐っても、相手が居ても居なくても、何所でも讚歎する事が出来ます。経文には常に是の語を作すと説かれました。釈迦牟尼如来の末法の讚歎は、南無妙法蓮華經の、五字七字であります。過去無量無邊不可思議阿僧祇劫の往昔、威音王如來の像法の時代の讚歎は、廿四字であります。

「我深く汝等を敬ふ敢て輕慢せず、所以者何（ゆえはいかん）、汝等皆當に菩薩の道を行じて、當に作仏する事を得べし」

此二十四字は、相手を壓しめ慢らずして、深く尊敬する所以を分明に説明してあります。法華經の修行の肝心は此廿四字に在ると云われます。南無妙法蓮華經の五字七字と此廿四字とは、言葉の数には長短がありますけれども、其心は同じ事であります。

南無妙法蓮華經の五字七字を口に唱うる事は相手の心に尊敬すべき仏性が有る事を信ずることも、其相手の仏性が速に顕現して、究竟圓滿なる絶対神聖なる者となる事を祈り、励まし、勧むる所以であります。口に南無妙法蓮華經と唱うる事は易行の中にも最易行であります。一切の宗教の行法の中において最肝要なる修行であります。是を但信口唱と申します。

虎が其子に乳を与へ餌を与へて養う心は、種族保存の根本であります。人間の母親の其子を想う慈悲とも共通するのみならず、遠く諸仏菩薩の大慈大悲とも共通します。此心はたとい禽獸に在つても、悪人に在つても、誰に在つても、齊しく尊敬可き心であります。此心を仏性と申します。仏性は凡そ心有る者には皆本来具足してあります。涅槃經には一切衆生悉仏性有り、いかなる悪人にも仏性有りと説かれました。此仏性が發達し現前すれば、則ちわれ等の對境、諸仏・菩薩ともなり、神とも成れるものにして、眞に尊敬すべきものであります。

宗教が礼拝讃歎の對境・相手として提供する処の、諸仏・菩薩も、神も、誰の目に見る事も出来ねば手に捉る事も出来ませぬ。但だ心の中に於て、尊敬すべき存在として、懶念をこらすより外にはどうする事も出来ませぬ。見る事の出来る者は結句觀念上の影像であります。神を見んと欲する人には有神論が成立し、神を見る事を欲せざる者、又は疑惑を懷く者には無神論が成立します。

人の心も亦目にも見えず、手にも捉られませぬけれども、其心の活動が善惡に亘つて如何なる事をも成

- 10 -

し遂げます。人の心の中に仏性が有つてお淨土ともなり、又憎惡が有つて無間大獄の大火焱ともなります。

人が他人に対して瞋恚を起すも此心であり、人が他人に対して、輕蔑を起すも此心であり、人が他人に対して憎惡を抱くのも此心であり、子が母に対して恋慕を起すのも此心であり、母が子に対して慈悲を起すのも此心であり、人が神を見んと欲するも此心であり、人が神に就て疑惑を抱くのも此心であります。

人が瞋恚の心を起し、輕蔑の心を起し、憎惡の心を起すが如きは日夜自らも経験し、又他人の起すのを見もし、聞きもします。その心が現代の軍備を作り、戦争を作りました。此の如き人の心に対しては尊敬する価値は見出しませぬ。其心は自ら無間地獄の火ともなり、餓鬼の飢渴ともなり、畜生の殘害ともなります。

神を見んとする心は神の國へ近づかんとする心であり、神の正義を学ぶんとする心であります。此心は尊敬すべき心であります。此心は人間生活に道徳的基礎を与え、精神的向上を指向するものであります。此心が人間を平和と幸福とに導くものであります。

「妙法蓮華經如來壽量品の自我偈に曰く、

『一心に仏を見奉らんと欲して、自ら身命惜まず』云々。日蓮が己心の仏界を此文に依て頭はず也。

其故は壽量品の事の一念三千の三大秘法を成就せる事、此經文也。秘す可し、秘す可じ。日蓮曰く、

- 11 -

「一とは妙也。心とは法也。欲とは運也。見とは華也。仏とは經也。此五字を弘傳せんには、不自信身命是也。一心に仏を見る。心を一にして仏を見る。一心を見れば仏也。」(善淨房御書)

一心に仏を見奉らんと欲する心、此一心が則ち我礼拝讚嘆可き仏・菩薩である。此一心を妙法蓮華經と称し、此一身を礼拝讚嘆して、南無妙法蓮華經と呼ぶと云う意であります。

日蓮大聖人曰く、

「釈迦、多宝、十方の諸仏は、我が仏界也、其跡を紹繼して其功德を受得す。乃至我等が己心の仰尊は五百塵点乃至所顯の三身にして、無始の古仏也。」(如來滅後五五百歲始觀心本尊錄)

我等が己心の一念は五尺の肉体、物質の一瞬の作用ではありませぬ。たとへば虚空の如く時間的に、無始無終の存在にして、空間的には無量無邊に遍滿する存在と見る時に、我等が己心の一念の中に、無始の往昔より、仏・菩薩・神は存在しました。其神が、其仏が、或時、或處に、エホバと呼ばれて、人間に現われ、釈迦牟尼仏として、印度に出現されました。其神も、其仏も、皆我等が己心中の神であり、仏ありました。此己心中の仏菩薩を、今日我等は礼拝恭敬して再びエホバとなり、釈迦牟尼仏として、此を出現せしめねばなりませぬ。此を出現せしめんが為の宗教であります。

妙楽大師の曰く、

「當に知る可し、身・土一念の三千也。故に成道の時此本理に稱<sup>さかづ</sup>うて一身・一念法界に遍し等云々。」

- 12 -

此一念の心が有ると云事は其身が有ると云う事であります。此身が有れば、此身の依止する所、此身の生活する國土が有らねばなりませぬ。衆生の心汚るれば國土も汚れ、衆生の心清ければ國土も清じて、淨土と云い穢土と云うも國土に二の隔てなく、只我等が心の善惡に由ると見えたりと、日蓮大聖人は仰せられました。

此身も、此國土も、我等己心の一念の現われた姿であります。現代の政治も経済も、形相に現われた枝葉末節に拘泥して、形質なき根本の心の問題の解決を忘れた所に、何所迄往っても收拾のつかない混亂が有ります。

人は唯パンのみを食て肉体的に活くる事は出来ますけれども、肉体本位の生活は歎嘆も無ければ、感謝もありません。放逸なる人間、秩序無き社会となり、狂暴なる猛獸、怠惰なる畜生となり、強盜・強姦・殺人の社会となります。アメリカのニューヨークを始め、諸大都市は正に其見本であります。裁判も、監獄も、何の役にも立ちませぬ。都市全体を監獄とし、國土全体を監獄とせねばなりませぬ。何所も彼処も犯罪所であり、誰も彼も皆犯罪人なるが故であります。手のつけようがない危険なる社会生活であります。宇宙旅行をしても、海底潜水艦を建造しても、アメリカに平和は到来しませぬ。精神的堕落の現象はアメリカ人の心の中から起りました。

西洋文明の根本的欠陥は外界物質の研究に終始して、人間をも亦物質の一種として取扱いました。是

- 13 -

に由て本来尊重す可き精神の活動さへも、亦物質の一種の作用の如く考えて、善惡の差別も無く、邪正の相違もわからなくしてしまいました。従て人間も、動物も、瓦礫も、大小便も、物質として大差無いような人生觀をもつて、生活するようになりました。されば他人を輕蔑するのも、他人を殺すのも、さして罪惡でも無いよう位想う結果となりました。讃歎すべき他人を悪口します。アメリカが「グート」、独逸が「黄禍」等の呪いの言葉を作つて、他人を呪うた事であります。現代悪世の大災と、利剣と、流血との恐怖から人類を救護して、安穩ならしめんが為に、一切の人々に対して本来尊敬すべきものを教えます。それは人の心にあります。人に尊敬の心を起させします。是を懶心本尊と称します。

人に対して尊敬の心を実現せんが為に、身に礼拝を行います。是を但行禮拝と称します。人に対して尊敬の心を表現せんが為に口に讚歎の詞を述べます。是を但信口唱と称します。是が則わち日本仏の三大秘法であります。日本の仏法の三代秘法は、併ら、但だ人こそは本来尊重す可き者である事を教へたるものであります。本来尊重の四字の発見が現代の人間の苦惱を解脱せしむる、唯一の宗教であります。

- 14 -

## 依法不依人

昭和五十年三月十六日

依法不依人の法門は、釈尊鷲林最後の御説法、大般涅槃經四依品に説かれたる法門であります。此の法門は古来仏教徒の中に広く伝持されました。龍樹は大智度論に之を採録して注釈を施しました。日蓮大聖人は依法不依人の四法に隨順して、自ら教相判決の態度を決定せられて、注釈を行われし様が報恩録に見えております。

近代の学匠が又此の依法不依人の文を引用して冒に憶説を開いております。日蓮宗門の道俗一般も依法不依人の法門を口ずさみ、宛も此の法門を理解せるかの如く想うて、数々誤りて十四誘法の輕善誘法の罪を犯す恐もあります。是に由て今爰に大般涅槃經の経文を検討して、依法不依人の経文の意義を顕揚せんと欲するものであります。

大般涅槃經卷六、四依品第八に曰く、

仏復迦葉に告げたまわく、「善男子是の大般涅槃微妙經の中に四種の人有り、能く正法を護り、正法を建立し、正法を憶念し、能く多く利益し、世間を憐憫す。世間の依となりて、人天を安樂にする。何等を

- 15 -